奈良県大和郡山市 古事記1300年紀事業
「ふるさと語り部エッセイ」

優秀賞

ハジチの手

大城　洋子

沖縄県

子供のころ、毎日のように遊びに行った隣の家は典型的な沖縄の木造家屋だった。年季の入ったその家には九十五歳を超える「おおきいおばあ」がいて何を語るのでもなく、日がな一日座っていた。白髪の髪はぼさぼさ、着ている着物もよれよれ、自分の身の回りのことをすることもできなくなった老女。しかし私はこの老女を尊敬していた、いやどちらかというと畏怖のようなものを感じていた。それは自然のままに抵抗することなく、限界まで老いたその姿をさらけ出していることに人間を超えた異形を感じたからかもしれないが、それ以上に彼女を神格視させたのは彼女の手の甲に刻まれた「ハジチ」だった。

ハジチとは手の甲に施す入れ墨のことで、女性が一人前になる印、成女儀礼として縫い針を束ねて突き模様を刻んだものだ。琉球女性のシンボルでもあったハジチは明治政府によって禁止され、現在ではもう消滅してしまった習慣だが、私が幼いころまでは百歳近くの高齢者の方にわずかに残っていたのだ。赤茶けて、皺だらけの手に彫り込まれたハジチは老女の蓄積された智慧を象徴しているようであり、この過酷な通過儀礼を乗り越えて大人になったという強さを感じさせた。

一人の大人になるにはなんと過酷な試練が待ち受けているのであろうと、老女の手をみる度に、子供ながら恐ろしくなったものだ。

現在では大人になるためにこのような過酷な通過儀礼など存在しない。成人式もただのお祭り騒ぎだ。そんなものを必要としないほど生きやすくなった社会を喜ぶべきなのかもしれない。しかし、楽さと引き換えに生き物としての感覚を失い、生きる覚悟を失った私たちは果たして幸せなのか。震災を経験し、忘れていた日本人としての価値観が掘り起こされつつある今日、生きることのへの覚悟と、幸福の基準を見つめ直す時に来ているのかもしれない。それを思う度に、私はあの老女の赤茶けた皺だらけの手を思いだすのである。